

「共謀罪」世論調査と危惧すること

写真は朝日新聞 4 月 25 日朝刊の「共謀罪」法案についての世論調査結果。世論調査ばらつく賛否。法案の呼称など、質問文の違いが、回答に影響している可能性もあると。

確かに、世界を揺るがす「テロ」という言葉を入れるかどうかで、回答も違ってこよう。テロだけではなく、安倍政権は北朝鮮情勢の「危機」をことさら煽っている。安全保障・治安に関心が高まるなかで、共謀罪にも一定の支持が集まるのだろうか。法案への国民の理解が進んでいないことも影響しているようだ。「一強」に驕りすら感じる強権的な安倍政権のもとで、共謀罪法案のゆくえが心配だ。

何もできなくて悔しいが、フェイスブックに共感する発言・言葉を掲載してきた。その一部を紹介したい。

・『AERA』5 月 1—8 号。元東京高裁判事の木谷明さんが語る「共謀罪」法案。

— 特定秘密保護法、安保関連法から連なってきた国民の自由・権利の制限、政府方針に反対する勢力の抑え込みを目的とした大きな政策の一環のように思えてなりません。戦前の治安維持法にしても、最初はおそるおそる無政府主義者や共産党員だけを取り締まるといふ触れ込みでした。それが社会主義者、自由主義者に拡大適用され、マスコミ、宗教家、文学者、芸術家まで対象となった。そこまで進んだら、国民にはもう反対するすべはない。国民はそうした歴史に学び、賢くなる必要があります。

・朝日新聞 4 月 21 日朝刊。問う「共謀罪」。作家・平野啓一郎さん。

— フェイスブックなどが発達した今、「友達の友達」は時にとんでもないところまでつながっていく。「法に違反しないように」ではなく、「監視すべき人間と見なされないように」と、日常的に意識しなければならなくなる。国民は萎縮し、社会の活力がそがれるだろう。政府に都合のいい発表だけが伝われば戦中の日本のように道を誤る。取材活動の自由が保障されるかも危惧する。



・朝日新聞 4月19日朝刊。問う「共謀罪」。映画監督・周防正行さん。

— 今回の法案は解釈の幅が広い。政府は否定するだろうが、権力に都合の悪い主張をする人を立件する武器を手に入れることになる。時の政権に声をあげることがはばかれる社会になるだろう。表現をする立場には確実に影響が出る。「私たちが何を考えているのか」を国家が絶えず監視する社会になる。政府は「一般人は対象ではない」とも言う。では、そもそも「一般人」とはどんな人か。誰でも犯罪をする可能性があり、誰でも「犯罪をした」と疑われる可能性がある。



すお・まさゆき 主な作品に『Shall we ダンス?』や映画『共謀罪』を題材とした『それでもボクはやってない』など

・朝日新聞 4月27日朝刊。問う「共謀罪」。作家・落合恵子さん。

— 「共謀罪」法案の国会審議を見ていると、無理に通そうとしているのがありあり。法務大臣でさえ答弁が危ういから法務省の刑事局長に答弁させる。テロ防止とは別問題なのに、東京五輪を引き合いに出す。国民に対するフェアな姿勢ではない。人間にとって何を考えるかは基本的な権利だ。共謀罪の問題点は「心の内」さえ処罰すること。「一般の人には適用されない」と言うが、信じられない。



おちあい・けいこ 元文化放送アナウンサー。主な作品に『ガ・レイト』『真田 忠臣蔵』など

30年ほど前、戦時中に軍事機密を漏らしたとして、北海道帝国大学(当時)の学生が逮捕された冤罪事件取材した。学生の妹や弁護士に話を聴いたが、「スパイ」がぬれぎぬだと明らかになった後も、周囲からの偏見は消えなかったと感じた。

共謀罪によって警察の動きが強まるのは間違いない。さらに恐ろしいのは、国民がその影響を受けることだ。私は長い間、市民運動にかかわってきたが、「運動は危ない」「近づくな」となりかねない。共謀罪には、ある人たちを「異質だ」と切り捨てる風潮を加速させる効果もあるのではないか。安倍政権は高い支持率なので法案を止めることは難しいという声もあるが、それでも反対していきたい。本当に話を聞いてほしいのは、抗議集会などに足を運ばない人たちだ。声高な「闘いの言葉」ではなく、関心のない人にも届く言葉で今後も問題点を伝えたい。

・朝日新聞 4月26日朝刊。問う「共謀罪」。作家のドリアン助川さん。

— 人が何を考えているかを罪にすることができるようになると、密告が起きやすくなる。「メールでこんなことを言っている」と通報して捜査機関が動く。国民それぞれが監視しあう。法律は等しく国民に適用されるはず。「共謀罪」はそうではない。デモを画策した人に適用されるかもしれないが、国有地が格安で特別な人に譲渡された時の「共謀」は問わないだろう。権力者側には振り向けられない。権力を強くするものだ。五輪のためなら多少の不自由はいいのか。かつての治安維持法のように、権力の道具に成り下がる可能性のある法律を、次の世代に残すべきはない。



どりあん・すけがわ 映画『多岐子』の経験を活かした小説『あなたはいらぬ』、『ユウキ』、『アノ』など

(2017年4月29日)